

< 書評 > 鍾敬文編 『中国民族学概論』

著者	余 志清
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	17
ページ	200-203
発行年	2000-03-30
その他のタイトル	<Book Reviews>Zhong Jinwen “ A Introduction to Chinese Folklore ”
URL	http://hdl.handle.net/2241/10339

- 弘文堂
(のち、1996『伝承と慣習の論理』吉川
弘文館 所収)
- 柳田国男 1910 「山民の生活」『山岳』4巻 3
号(『定本』4巻所収)
- 柳田国男 1910 「湿地を意味するアイヌ語」
『歴史地理』16巻1号(『定本』20巻所収)
- 柳田国男 1910 「石神問答」(『定本』12
巻所収)
- 柳田国男 1912 「峠をヒヤウと云ふこと」
『歴史地理』20巻2号(『定本』20巻所収)
- 柳田国男 1916 「マタギと云ふ部落」『郷土研
究』4巻9号(『定本』27巻所収)
- 柳田国男 1916 「方言」(論文ではなく、報告欄
である)
『郷土研究』4巻1号
- 柳田国男 1928 「真澄遊覧記を読む」(原稿、同
年2月『雪国の春』掲載)
(『定本』2巻所収)
- 柳田国男 1929 「人形とオシラ神」『民俗芸術』
2巻4号(『定本』12巻所収)
- 柳田国男 1930 「正月及び鳥」『奥の手ぶり』序
(『定本』3巻所収)
- 柳田国男 1930 「東北と郷土研究」『東北の土
俗』(『定本』25巻所収)
- 柳田国男 1931 「音韻事象の考察(1)」『方言』
1巻1号(『定本』19巻所収)
- 柳田国男 1931 「採集と観測」『国語教育』16巻
9号(『定本』18巻所収)
- 柳田国男 1931-1932 「鼻歌考」『ごぎやう』
10/10, 11, 12, 11/1, 2(『定本』17巻所収)
- 柳田国男 1932 「盆すぎメドチ談」『奥南新報』
19, 22, 25日(『定本』4巻所収)
- 柳田国男 1932 「犬子囃、あく太郎(原題「童
話研究二篇」)」
『旅と伝説』第五年第六号(『定本』8巻
所収)
- 柳田国男 1934 「地名と歴史」『愛知教育』
559号(『定本』20巻所収)
- 柳田国男 1934 「国語史論」『国語学講習録』

- (『定本』29巻所収)
- 柳田国男 1935 「国史と民俗学」『岩波講座日
本歴史』(『定本』24巻所収)
- 柳田国男 1937 「親方子方」『家族制度全集史
論篇Ⅲ親子』(『定本』15巻所収)
- 柳田国男 1940 「文学と土俗の問題」
(のち、1964『柳田国男対談集』筑摩書
房 所収)
- 柳田国男 1941 「社会と子ども(原題「誕生と
成年式」)」
『岩波講座倫理学』第七冊(『定本』15巻
所収)
- 柳田国男 1959 『故郷七十年』(『定本』別巻3
所収)
- 柳田国男 草稿「比較民俗学の問題」(『定本』
30巻所収)
- ※『定本』……『定本柳田国男集』(筑摩
書房)のことである。

文中の引用文()内の年号は、初出の年である。
『定本』(または後の単行本)の年と区別するた
め括弧づけにした。そのため、ページ数は便宜
的に『定本』(または後の単行本)のものを付し
ている。なお本稿においては赤坂憲雄・内野吾
郎・小熊英二の論が大変参考になった。

鍾敬文編 『中国民俗学概論』

余志清*

本書を紹介する前に、中国民俗学の歴史を簡
単に振り返りたいと思う。

中国民俗学は西洋の先進的な人文科学和社会
科学の学説の伝播による新思潮の影響のもと、
1919年の五・四新文化運動とともに始まり、一
種の民族意識の覚醒として登場した。初期の民
俗活動は長期にわたり「正統文化」に抑圧され
ていた民主主義思想を発掘し、民衆の信仰・口
※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

承文芸・行為伝承などを研究し、民俗・民俗文化
を改めて解釈し直し、新しい民族文化を建築し
ようとしていた。

1918年の北京大学「歌謡徴集処」の成立は現
代中国民俗学の発端とされ、当初から文芸運動
と強く結びついていた。1920年に「歌謡徴集処」
が「歌謡研究会」に転身し、その後「歌謡週刊」
が刊行され、方言調査会と風俗調査会が設けら
れた。1927年から民俗活動の中心は広州の中山
大学に移り、同年の秋冬に中山大学民俗学会が
組織され、翌年「民俗週刊」が刊行された。中山
大学期の民俗学者は北京大学期の研究成果を継
承した上、民族学・人類学・社会学の理論を受け
入れた。この時期の民俗学活動は、中国現代民
俗学の学問としての確立期と考えられている。こ
れに続いて、1930年に杭州民俗学会が成立した。
学会は「民俗月刊」を刊行し、外国の民俗学理
論を紹介し、民俗学研究を一層発展させた。

しかし、1930年代から1970年代まで、中国民
俗学は低迷の状態にあった。日中戦争や内戦が
続いたからである。また、中華人民共和国成立
以後は、当時のソ連の学術体系が取り入れられ、
資本主義（ブルジョア）の学問とみなされたた
めに批判され、放置されてしまった。

民俗学が再び日の目を見るのは、文化大革命
が終わった1979年、鍾敬文など七人の教授によ
り中国民俗学再建の案が提出され、1983年鍾
敬文を理事長として中国民俗学会が組織される
時まで待たなくてはならなかった。その後、全
国各省市で、続々と地方民俗学会が成立し、フ
ィールドワークと民俗の研究、整理が盛んに行
われ、以来中国の民俗学は繁栄的な時期を迎え
ている。さらに1988年に国家から「独立学科」
として認定され、長い間続いていた民俗研究
の民間的狀態が打ち切られた。

この間に、烏丙安『中国民俗学』（1985）、張
紫晨『中国民俗と民俗学』（1985）、陶立璠『中
国民俗学概論』（1987年）という三冊の概説書
が出版されている。この三冊には、それぞれ特
徴があり、80、90年代の20年近くの間、民
俗学の教

育と研究を支えてきた。今も中国民俗学にお
ける必読の入門書である。

80年代からの中国民俗学は今までにないス
ピードで発展している。民俗学機関がたくさん
設けられ、一連のフィールドワークと研究・整
理作業が行われ、多くの成果が出された。同時
に、国際交流が増え、外国の理論が積極的に紹
介され、各種の民俗書籍が刊行された。若い世
代に民俗学に対する熱意が高まる一方で、大
学にも次々と民俗学専攻が設立された。こうし
た発展の中で、最新の研究成果を含めた概論書
のないことは問題とされていた。そこで出され
たのが本書なのである。

本書の主編である鍾敬文は中国民俗学の開
拓者として、その学術活動は現代中国民俗学
の発展と深く結びついている。氏は早くから
日本に留学し、中国民俗学の北京大学期に
「民俗週刊」の初期編集にあたり、杭州民俗
学会時期にも中心的な役割を果たしていた。
1979年以後氏は中国民俗学の再建に奔走し、
中国民俗学会のリーダーとして、長期にわたり
民俗学の人材の養成に全力を尽くしている。
90年代初期、氏は近年の民俗学の発展を鑑
みて、新しい入門書を編集しようと決意した。
氏のもとに、32人の民俗学専門家が集まり、
8年にわたって、本書を完成したわけである。

二

本書は、次のように構成されている。

目次

第一章 序論

第一節 民俗と民俗学

第二節 民俗の基本的特徴

第三節 民俗の社会機能

第四節 中国民俗の起源と発展

第二章 物質生産民俗

第一節 農業民俗

第二節 狩猟・遊牧・漁業民俗

第三節 職人民俗

第四節 商業と交通民俗

第三章 物質生活民俗	
第一節 飲食民俗	
第二節 服飾民俗	
第三節 居住建築民俗	
第四章 社会組織民俗	
第一節 社会組織民俗の分類説明	
第二節 宗族社会組織	
第三節 社団と社区組織民俗	
第五章 歳時祭日民俗	
第一節 歳時祭日民俗の由来と発展	
第二節 歳時祭日民俗の活動と特徴	
第六章 人生儀礼	
第一節 人生儀礼の性格	
第二節 誕生儀礼	
第三節 成年儀礼	
第四節 婚姻儀礼	
第五節 喪葬儀礼	
第七章 民俗信仰	
第一節 信仰の対象	
第二節 信仰の媒介	
第三節 信仰の表現方式	
第四節 民俗信仰の基本的特徴	
第八章 民間科学技術	
第一節 民間科学知識	
第二節 民間工芸技術	
第三節 民間医学	
第九章 民間口承文学 (一)	
第一節 口承散文叙事文学の様式と分類	
第二節 口承散文叙事文学の伝承と変化	
第三節 口承散文叙事文学の講述と機能	
第十章 民間口承文学 (二)	
第一節 民間詩歌の起源と伝播	
第二節 民間詩歌の類別と特徴	
第三節 民間詩歌の表現手法と機能	
第四節 民間歌節・歌俗・歌手	
第十一章 民間言語	
第一節 民間言語の性格	
第二節 常用型民間熟語	
第三節 特用型民間熟語	
第十二章 民間芸術	

第一節 民間音楽	
第二節 民間舞踏	
第三節 民間戯曲	
第四節 民間工芸美術	
第十三章 民間遊戯娯楽	
第一節 民間遊戯娯楽の起源・特徴・機能・分類	
第二節 民間遊戯	
第三節 民間競技	
第四節 民間曲芸	
第十四章 中国民俗史略	
第一節 古代民俗に関する記録と観点	
第二節 近代啓蒙民俗思想の発生と発展	
第三節 現代民俗学史	
第十五章 外国民俗学概況	
第一節 欧米民俗学	
第二節 ロシアとソ連の民俗学	
第三節 日本民俗学	
第四節 韓国民俗学	
第十六章 民俗学研究方法	
第一節 主な民俗学流派とその方法	
第二節 民俗資料の収集と整理	
第三節 民俗研究の一般的方法	

本書は二つの部分に分けられ、前編は各種の中国の民俗事象の紹介を重んじ、後編は民俗学の基本理論・方法・歴史の紹介を重んじている。構成から見ると、今までの概論書と比べ、より完備した中国民俗学の体系化を図り、模範的な概説書ができたといえよう。

32人の著者とも長期の民俗学の教育と研究を行っている経験に富む専門家であり、他の概論書のメリットを汲み取り、欧米や日本・韓国などの理論に対する摂取と研究にも積極的な姿勢が窺われる。中国民俗学の近年の模索の軌跡と研究蓄積を示す好著である。

三

本書は、中国国内で「文化界の盛挙」,「開拓的」などの高い評価を与えられた。今後も民俗学の教育と研究における大きな役割を果たして

いくであろう。しかし、編集当初は大学の民俗学専攻の一般的な教科書として企画されたが、結局その目標を果たせず、教育上の参考資料として使われるに留まった。執筆者の数が多くて、構成上の統一が困難であったこともあるが、それよりもむしろ中国民俗学がまだ未成熟な段階にあるということであろう。

このことについて筆者は中国民俗学が以下の課題に直面していると思っている。

民俗学理論と多民族・多文化 中国は56の民族がいる多民族国家であり、それぞれの民族文化は多様な性格を持っている。このため中国は「民俗学者の楽園」と言えるだろう。しかし、1つの理論で56の民族文化の特徴を網羅するのは難しいことであり、この点からみると、本書は前の陶著『中国民俗学概論』を越えていないと筆者は評価する。簡単に各民族の民俗事象の羅列をするだけでなく、それを科学的に分析しなければならない。模範的な理論体系を建設することを目指す一方、多民族と多文化の現実を十分に重視し、「多民族の民俗学」を発展させていくべきであろう。

方法論の中国本土化 五・四時期、西洋の学説が初期の中国民俗学を推し進めていた。以来中国民俗学は西洋の方法論に頼り、長い模倣期を経てきたが、民俗研究が急速に発展している

今日、方法論を本土化することは急務であると思う。本書には古代と近世の民俗観を整理し、中国民俗学の伝統を掘り出すことを試みている。中国は文献による民俗資料が最も豊富な国なのだから、それを系統的に掘り出して整理し、文献学を民俗学の方法論として発展させていくことは重要であろう。また、フィールドワークはよく中国民俗研究の弱点と言われているが、古代「採風」活動（民歌の収集）のような伝統を生かし、田野調査をより重視し、細緻・厳密なフィールドワークを提唱すべきであろう。

民俗学と現代化 中国の民俗学が曲がりくねった道を経てきたように、民俗文化も不公平に取り扱われていた。特に「文化大革命」の時期、ほとんどが封建主義・資本主義の文化として廃止されてきた。今やっと民俗文化の回復期を迎えてきたが、こんどは急速な現代化にぶつかり、変容し、消えていく。民俗文化を研究・整理するだけでなく、それを保護し、再構築することも中国民俗学者の責任であろう。

参考文献

- 『民俗学概論』 鍾敬文主編 上海文芸出版社
1998年
『中国民俗学概論』 陶立璠著 佐野賢治監訳
上野弘稔訳 勉誠社 1997年